



2年ぶりにカンボジアの首都プノンペンを訪ねた。タイとの国境地帯の紛争が続いていたが、入国した7月28日に、両国はマレーシアで停戦合意の発表を行った。空港を出て、トゥクトゥクに乗ったが、日本人である私に「タイ人は残酷だ」と、執拗に交流サイト(SNS)で流れている動画を見せてくる。今回の紛争で、カンボジア人が怒っていることを実感した。プノンペンの街は、中国マネー(投資)による高層ビルの建築で、様変わりをしていった。カジノホテルが金色に輝き、中華料理のレストランや中華系銀行の進出もあって、各所に中国語の看板が目に入った。当金庫が業務提携しているカナディア銀行の副支店長は「中

カンボジアとタイの国境問題

陸路での商流再開望む

国企業の投資にはスピード感がある」と話してくれた。また、現在、タイとの陸路は物流が止まっており、生活雑貨、食料品などの供給について懸念があったが、洗剤などは自国生産に切り替え、物資はベトナムや中国からの輸入に頼ることで、市場が安定していた。街のスーパーでは豊富な食材が並んでいた。タイから進出している大手のガソリンスタンドや、コーヒーショップ、コンビニは市民の需要があり、通常通りの営業を行っていた。2011年以降、尖閣問題からチャイナ+1(プラスワン)として、東南アジアへの海外進出が加速し、カンボジアにも大手量販店が出店した。当金庫は、13年に取引先向けの視察ツアーを実施し、

「製造コストが抑えられ、将来有望な国」として案内した。以後、カンボジアでは海外投資が増え、



王宮近くの公園で夕食を取る市民
〓カンボジア・プノンペン

人々の暮らしは徐々に良くなった。電力も安定供給にあり、水道などのインフラ整備も進んだ。一方、原材料の調達は、引き続き海外依存が高く、10年前は平均月収60^ル(約9千円)と言われた一般労働者の最低賃金が208^ル(約3万円)まで上昇した。優秀な人材を確保しようとするれば、他のアジア諸国の人件費と変わらず、労働集約型の製造業にとっては、投資メリットが薄い国になったと言えよう。夕方に王宮辺りを散策したが、運動する人、犬と散歩する人、家族と食事をする人を多く見た。東南アジアでは経済力が弱いカンボジアであるが、近隣国との共生による投資を導く必要がある。現在止まっている陸路での商流の再開を望み、国境問題については、両国の平和的な解決を期待したい。(岐阜信用金庫バンク駐在員事務所長 高橋英孝)